

○基調講演

「あなたが突然、犯罪被害者遺族になったら・・・」

犯罪被害者御遺族 寺輪 悟 氏

皆さんこんにちは。ただいま御紹介いただきました寺輪と申します。

このたび警察の方から、犯罪被害者週間中央イベントでの講話の依頼を受け、東京までやってまいりました。

娘の事件が起きた当時は、私が住む三重県では、犯罪被害者支援条例もなく、いろいろな苦労がありました。もちろん、事件に遭う、そんな世界とは全く無縁でした。その時の想いを三重県に伝えたことで、犯罪被害者支援条例が制定され、今では県内全市町に条例、要綱が制定されました。

私が強く思うのは、遺族の苦しみは、住んでいる場所や地域で変わることはないということです。だからこそ住んでいる地域の条例があるとかないとか、そんなところで支援に格差が生まれてはいけない、そういうことを願うわけです。

事件から10年、いろいろな苦しみや困難が私たち犯罪被害者遺族にはありました。私の経験が、今後の全国における犯罪被害者支援の発展に役立てられればと思い、僭越ながらお話をさせていただきます。

話をする前に、普段こういう場所で喋るのが慣れていないこともありますし、嘸んだり、どもったりもします。お聞き苦しい点もあるかもしれません。時間も守れないかも知れません。気分が悪くなる内容もあります。順番が分かりにくいかもしれませんが、ひとつ広い気持ちで最後まで聞いてください。

私が皆さんに一番お伝えしたいことは、皆さんも、いつ犯罪被害者そして犯罪被害者遺族になるか分からないという現実があるということです。そして話を聞く上で、皆さんの頭の中に、お父さんでもお母さんでも恋人でも誰でもいいです。もしもこれが自分の身に起きたことならどうなるのだろうということを頭に入れながら聞いてくれれば幸いです。

それでは簡単ですが、事件当時のことを少しお話ししたいと思います。私は事件当時45歳の自営業、妻は45歳の看護師でした。お兄ちゃんは大学1年生、名古屋の大学に1人で寮に住み、そこから大学に通う1年生でした。長女は高校2年生、大学進学に向け、ようやく進路を決め、大学に受かるよう勉強する途中でした。博美は中学3年生でした。どこにでもいる平凡な普通の家族でした。

そんな中、博美は平成25年8月25日の花火大会の日に、三重県朝日町の路上で、家からすぐ近いですけれども、当時18歳の少年に鼻と口を背後から手でふさがれ、空き地に連れ込まれて殺害されました。娘は誕生日を迎えたばかりの15歳とたった3日でした。

犯人は事件が発生してから半年以上もたった、今となれば高校生だったのですけれども、卒業式の翌日、平成26年3月2日に逮捕されました。翌年3月の裁判員裁判では、懲役5年から9年の不定期刑、その判決を受けた経緯があります。

この事件の前までは、本当に何不自由なく、私もそちら側に座っていたと思います。博美はただ友達と花火を見に行っただけなのに、なぜこんなことになったのだろうと、私は随分模索しました。

博美は保育園の頃から、お姉ちゃんと一緒に新体操というものに打ち込んでいました。小学校、中学校と部活に入らず、学校が終わると妻がすぐ車で迎えに行き、車の中の練習会場まで向かう中でお弁当を食べ、毎日新体操漬けでした。東京や長野、いろんなところに合宿や遠征も行きました。今思えば、高校受験を前にして、物心ついてから博美が初めて自由な時間を手にしたのも、高校受験というものがあつたからだと思います。私たち夫婦も少々は許していました。ですから博美と連絡が取れなくなったあの日も、ふらっと帰ってくるのだらうと気にもしていませんでした。

しかし、中学3年生ということで、塾に通い始めた博美が、塾をサボることは今まで一度もなく、塾から電話がかかってくると、何かおかしいんじゃないかということになり、私たちはその辺を探しに行くようになりました。

一緒に花火を見に行った友達にも声をかけたのですが、「花火が終わったあとは普通に別れたよ。」「帰ったはずだよ。」と。行きそうなところも探したのですけれども、やっぱり見当たらず、何か事件に巻き込まれたのではないかと思い、深夜にもかかわらずその足ですぐ四日市北警察署というところに行きました。

警察官の対応はすごく良く、すぐ捜索願を受理してもらい、すぐさま行動してくれました。それから何度も私に、こまめに捜査内容「今どんな状況か。」「どのへんを探している。」というのを連絡してくれました。そんな中、最後にくれた1本の電話で「博美さんとよく似た年頃の御遺体が発見された。」と連絡がありました。私はすぐ仕事を切り上げ、自宅に帰ろうとしましたが、家が近づくにつれ、いつもと違う様子に気付きました。生活道路は規制線が張られて通行止め、赤色灯を回した警察車両が列を成し、上空にはヘリコプターが2機ぐらい飛んでいたと思います。私はただごとではないと思いました。しかしまだ心の底では、人違いであってほしいと強く願っていました。家に帰ったら帰ったで、署まで来てほしいと。そして名古屋に住んでいる一人暮らしの兄も呼んでくれということで、慌てて連絡を取り、私と妻とお姉ちゃんとお兄ちゃんを待ち、そのまま四日市北警察署に行きました。

四日市北警察署に着いた途端、テレビ局、報道、マスコミ各社がものすごい数いました。あまりの大きさ感にびっくりしました。4人とも密室で2時間ぐらい閉じ込められたと思います。でも今思えば、私たちをマスコミから守ってくれたと感謝しています。それから「遺体を確認してほしい。」と言われ、当時、四日市北警察署には死体安置所はありませんでしたから、四日市南警察署が少し離れたところにあるのですが、そこまで裏口をくぐり、マスコミをかわしながら警察車両に乗り、死体安置所まで向かいました。

到着すると、降りた途端、今まで嗅いだことのないようなものすごいにおいが私の鼻をつきました。車を降りた途端、すごく離れているのにこれだけのにおいがする。こんなにおいなんだと思いながら。今でもそのにおいは鼻から取れません。

意を決して安置所の中に入り、係の方が袋を開けてくれました。人の遺体を見るのは初めてでした。まさかそれが自分の探していた娘になるとは夢にも思っていませんでした。私はお兄ちゃんとお姉ちゃんには、とっさに判断し、これは見せられないと思い、「車で待っている。」「私と妻で先に確認しに行く。」と言って、部屋の中に入っていました。

係の人が白い袋を開けた途端、においが増しました。両手はバンザイ、両足はM字、顔は左を向いていました。目は閉じていました。夏の暑い日でしたから、顔や手、足、体中がパンパンに膨れ上がっていました。血管は浮き出、見るも無残な変わり果てた遺体がありました。あごは外れ、髪の毛、目、鼻、体中

にうじ虫が這いつくばっていました。すごい光景でした。あとで聞いたのですが、そのうじ虫の大きさで、死亡日程が分かるそうです。それでも、ひと目見た瞬間、探していた博美だということはすぐに分かりました。

妻と姉と博美で3人とも同じマニキュアを足に塗っていたそうです。妻はそれが、「博美やに一。ママ、ここだよ。」と言っているように感じ、半狂乱になっていました。私と妻は「間違いなく私の娘です。」と言ってその場をあとにしました。表に出ると、お兄ちゃんもお姉ちゃんも「博美なの？」と。私は「そうだよ。」と俯きました。「私も会いたい。」「俺も会いたい。」と。しかし、どうしてもあの姿は、お兄ちゃんとお姉ちゃんには見せられなかった。それだけひどい状態だったのです。半ば無理やり、力づくで車に押し込み、「なぜだ！なぜだ！」とお兄ちゃんは私をどつき、お姉ちゃんも私に突っかかってきました。どうしてもあの姿は、2人には見せることはできませんでした。

そして事件から半年余り、犯人が捕まらない日々が続きましたが、三重県警の警察官の方たちは夜も寝ないで捜査をしてくれているという話を聞きながら、「なぜだ。」「何が起こったんだ。」「誰が殺したんだ。」と、そればかり考えていました。

当時の警部補からは、「娘さんの最後に着ていた遺品、服を返せなくなる。切り刻んでどうしてもDNAを出したい。返せないけどお父さんいいですか。」と熱心な眼差しで私に問いかけたので、私は「そうしてください。」と逆にお願いしました。その結果、そこからDNAが出て、犯人逮捕に至りました。当時の警察官の方たちには本当に感謝しています。

平成26年3月2日、警察から犯人と思われる人物を事情聴取しているとの連絡を受け、そのあと少年が逮捕されました。最初の逮捕容疑は、強盗殺人でした。現在、少年はもとより、少年の家族からの謝罪はもちろん、1本の電話や1通の手紙もありません。襲って倒れている博美を置いて現場から立ち去った時、少年は何を感じていたのか。良心もなかったのか。私は、後々の裁判で、加害者の少年から「立ち去る時は博美が生きていた。」と証言されたことが大変悔しかったです。博美をひどい目に遭わせておきながら、少年は半年以上もの間、平静を装い、全く普段通りの生活をしていた。人ごとのように。自分のことばかり考えていた身勝手極まりない犯行です。

先程言いましたが、その後、裁判で5年から9年の不定期刑が確定し、損害賠償請求金額は7,700万円の支払命令。その刑も、今年の令和5年9月5日に刑が終わり男は出所してきています。手短なのですけれども、簡単な事件内容です。

そしてこれからは、私たちが一番苦労した話を順に追って話していきたいと思います。一番初めに大変だったのはマスコミ対策でした。加害者不在ということで、被害者宅に報道が押し寄せました。警察署を出てから遺体を確認し、私たちは家に帰る途中、家の周りには黒塗りの県外ナンバー。すごい数です。5台6台、家中を報道陣が取り囲んでいました。

私たちは家に入れず、そのまま素通りしました。気になった友達が何度か自宅に通ってくれましたが、やはり声をかけられ「近所の人ですか。」「どんな娘さんでしたか。」といろいろ聞かれたそうです。私たちは家に帰らないまま、4人でビジネスホテルに泊まりに行きました。その間にも、テレビをつければ私たちの知り得ない情報。報道番組が勝手な模索をし、ありもしないことを報道していました。どこで手に入れたか分からない顔写真やプリクラ、一気に日本中に放送されました。葬儀場の中にまで、友人のふりをして入っている者もいました。1日にして、日本中に寺輪博美という名前は知れ渡りました。葬式を挙げ、茶毘に付し、博美が本当の意味で自宅に帰れたのは、事件発生から3週間後でした。

次に私たち 4 人家族は精神がおかしくなりました。自分たちでは動くことも、食べることも、寝ることも、昼も夜も、時間も、全く関係なくなりました。私は 1 か月で 17 キロ痩せ、ストレスで歯も 3 本抜きました。

その頃、犯罪被害者支援センターのサポートがすぐに入ってくれました。動けない私たちを半ば無理やり担ぎ、車に乗せ、わけの分からない精神病院に連れて行かれました。しかし、その精神病院が、のちに私たちが社会復帰をするのに、ものすごく威力を発揮したことを私は痛感しています。

当時の主治医の方も、とても信頼のおける名医でした。「寺輪さんが受けた悲しみを大きさにすると計り知れない。これくらいの球にするとしましょう。しかし、私たちはそれを小さくすることはできる。一生なくなることはない。でも小さくするには、やはりカウンセリングが必要だ。」と。毎週木曜日に仕事を休み、8 年ぐらい通いました。妻はまだ今でも通っています。

しかし、その悲しみを小さくするにも個人差があるようです。私も長男も長女も構わず当たり散らし、無茶苦茶していました。しかしそんな中、妻だけは気丈に振る舞っていました。私たちはそれに全く気付きませんでした。自分のことばかり考えていました。つらいのは同じですけれども、そんな余裕は私にはありませんでした。

そんな中、少しずつですが、一人ひとりが社会に関わりを持ち、世に出ていこうかなという時に、ようやく妻は博美と心ゆくまで向き合えるようになったのだと思っています。泣きたい時に泣けない、悲しい時に悲しめない、感情を押し込んだ場合、やはり悲しみの大きさが小さくなるのは、非常に遅くなるそうです。妻は外に出られるようになるのに 6 年という月日がかかりました。それが長いか短い、私には分かりませんが、ただ妻に目いっぱい悲しませてやれなかったこと、それがなかなか社会復帰できなかった要因だと私は思っています。

そんな中、気丈にも、お兄ちゃんもお姉ちゃんも、社会に出ていったのですけれども、やはり耐えられず、お兄ちゃんは大学をやめ、長女も進学するのをやめました。長女に至ってはいまだに就職できていないのが現状です。

そして、いくら悲しんでいても、無情にも生活していくには、お金がかかるという現実があります。それぞれ家庭の事情もあるでしょう。電気、ガス、水道、家賃、保険、年金、学費、携帯代、市・県民税から全て事件に関係ありません。そこに家の事情は関係ない。皆さんが御自身なら、どれくらい持ちこたえるのでしょうか。貯蓄がなければ、悲しんでもいられないという現実もあります。

国が私たちにしてくれたのは、320 万円、口座を 2 つ作り私の口座と妻の口座に 160 万ずつお互いに振り込む、それだけです。当時、県にも市にも条例はありませんでしたから、何にもしてくれませんでした。自分が身を置いている市町村、何の手も差し伸べてはくれません。つらいことがあっても、自力で頑張ってください。そう言われているような気がして、当時は何も思いませんでしたが、今思うと非常に冷たいなど、寂しいなどと思っています。

報道では、1 人が殺害されたことになっていますが、そのことによって沢山の周りの人の人生が狂わされたことに間違いありません。15 歳というデリケートな時期に受けた衝撃は計り知れないと思います。

その年の年末、私ども 5 人家族は何でも話せる家族でしたから、いろんな話し合いをし、3 つの約束を立てました。

1 つ目は、後追いをしない。これは私、妻、お兄ちゃん、お姉ちゃん全員で約束しました。一番先に考えるのは、こどもを救えなかった、親としての責務を全うできなかったという罪悪の念があります。これ

は必ず考えると思います。しかし残されたお兄ちゃん、お姉ちゃん、この子だけでも守ってほしいと。お兄ちゃん、お姉ちゃんもそれに賛同してくれて、馬鹿なことはしないと約束をしてくれました。

そして2つ目は、私と妻はアルコールが大好きでしたけれど、酒をやめるということです。何かあればすぐ酒に逃げてしまう。多分アルコール中毒になるでしょう。そして酔っ払った勢いで、歩いて10分ぐらいのところに加害者の家がありますから、滅茶苦茶しに行くでしょう。

そしてもうひとつは、加害者の家には何があっても行かないです。そんな約束でもしないと、家族の中の誰かが、多分、加害者の一家を皆殺しにするでしょう。向こう側に行くと思います。そんな約束でも立てなきゃ、私たちはやっていられませんでした。

そして犯人が捕まってからは裁判という苦しい日々が始まります。全てが初めてのことです。何が何でも全く分からない。犯人は、当時18歳の少年でした。少年法改正前の事件です。事件現場の近くに住み、辿っていけばお兄ちゃんも同じアルバイトをしたと。

初めて私がこの男に会ったのは家庭裁判所です。私は顔を見るなり、すぐさま殴りかかりにいきました。それこそ殺しに行く勢いです。しかし加害者は看守3人に守られていました。私は3人に取り押さえられ、そのまま家庭裁判所の退廷を命じられました。その時は、かなりの怒鳴り声で、相手に罵声を浴びせました。

残念なことに起訴事実は殺人に持っていくことはできませんでした。最初の逮捕容疑は強盗殺人。しかし結局は殺意が認定できず。博美は死んでいますから、博美の言い分は聞けない。加害者の言うことありき。それを全部鵜呑みにした検察側は、強制わいせつ致死と窃盗、かなり落とされた罪で起訴されました。このことについても、検察官からは納得のいく説明はありませんでした。

そして、少年は裁判員裁判で9年の不定期刑となりました。私は被告人質問で法廷に入り、男の顔を見ながら「お前が殺したんだろう。はっきり言え。」と言ったら「はい。」と言いました。「裁判長。はい、と言ったじゃないか。」と言ったけれど、それも認められませんでした。「なぜだ。自分自ら返事したじゃないか。」と言っても、それもまた認められませんでした。

最高10年の不定期刑にもならず、1年減刑されました。9年です。私は裁判長に「なぜ9年だ。10年なぜもらえないんだ。」と、そこでも裁判長に詰め寄りました。「なぜ1年減刑なんですか。」と。裁判長は、「それはもう決まったことですから、お答えできません。」と、こういう返事でした。私は、裁判長に説明責任はないのかと問い詰めましたが、口を開けることも、私の方を見ることもありませんでした。2審の控訴も考えましたが、裁判が長引くと、未決勾留が長引くので、泣く泣くその9年の判決をのんだという経緯があります。裁判官、検察官にとってはひとつの事件に過ぎないかもしれませんが、私たち家族にとっては一生に一度の、重要な、重大な裁判でした。

しかし、私は何度か裁判が行われている中で、初めての裁判なのに気付いたことがありました。この裁判は殺された博美の無念、遺族が仇を取る裁判とは違う。生きている加害者の裁判。生きている加害者の刑をみんなで決める裁判だと、素人の私でも気付きました。そこに犯罪被害者の想いは全く入っていませんでした。

担当する裁判長、その裁判長が加害者寄りの裁判長か、被害者寄りの裁判長かで、大きく量刑が変わります。皆さんこれは紛れもない事実です。今のこの時代、博美の事件が起こったとしたら、多分15年は打たれているでしょう。しかし、当時はそんなことはなかった。私はこれが悔しくてたまりません。しかし、これが今の司法です。悔しい思いをしている犯罪被害者や犯罪被害者遺族はたくさんいると思いま

す。

そして、男は少年法と人権で守られています。しかし、博美は殺された時点で人権がなくなり、戸籍、通帳、何から何まで抹消され、報道やネットでは、実名、顔写真、プライバシーや人権すら全くなりません。それはもう人権がないからです。しかし、加害者には人権がある。だからプライバシーや秘密保持が守られるということです。今はネットで検索したら出てきますが、決して公には晒されません。

そして私は、男が高校卒業後に逮捕されたということを非常に腹立たしく思います。在校中の生徒が起こした事件です。幾ら夏休みとはいえ、高校卒業資格が得られています。博美は被害に遭ったことで、卒業証書も、義務教育すら出ていません。小学校、中学校の担任の先生、クラスメイト、みんなが自宅で卒業式はしてくれました。歌も歌ってくれました。卒業証書も私が代わりに受け取りました。しかし、当然ながらそこに番号は入っていません。しかし加害者の男は、高校卒業資格を得られている。私はどうしてもそれが許せなかった。

ですから三重県教育委員会にすぐ電話して、「高校卒業の定義は何だ？」と問いただしました。教育委員会の答えは「単位と道徳、その2つ。」そういう答えが返ってきました。「在学中に人を殺しておいて、道徳を得られたのか？卒業を撤回しろ。大学でも剥奪はできる。除名もできるはずだ。」と言いましたけれども、三重県そして全国教育委員会ではいまだそんな事例はないと、前例がないことはできないということで、この件も踏みにじられました。今でも何とかしたいと思っています。

そして去年の10月、刑期満了が近いということで、男が収容されている刑務所の管轄する保護観察所の方から手紙が届きます。仮釈放に関する書類が送られてきました。私はそんな制度があるのかと思ひびっくりしました。9年満期で入っていると、てっきり思っていました。

少年が収監されて以降、一度も博美に対する謝罪の意を表したことがないこと、全く誠意や反省が見受けられないことを理由に反対意見を出しました。たくさんの準備書面です。最初に来たのが令和4年10月19日、刑事施設の長から仮釈放を許すよう申し入れましたと。そして次には検察、意見陳述をするなら、この仮釈放に不満があるなら、免許証、健康保険証を1通ずつ用意してコピーしろ。そして意見等陳述書を1通書けという書面が来ます。そして確かにこれを受け取ったよという連絡も来ます。

その書類の中で、どうしても私が許せないのが、被害者の法定代理人、親権者。被害者が死亡し、又は心身に重大な故障がある場合の親族。人に対して重大な故障があるというこの文句に引っかかりました。また、心をえぐられたように思います。

そして、その最後の4項目目、ここには加害者に対する事項を書けと。氏名、生年月日、そして罪名、非行名、事件の概要、それを書いて出せと、保護観察所は言っています。もちろん書くことも嫌ですし、これは白紙で出しました。

そして今年の1月、仮釈放が許可されませんでしたと通知が来ました。私はすごく喜びました。「これでもういいんだ。9月まで満期だから、もう出ることはないだろう。8か月しかないんだから。」と思っていたら、ちょうど3か月目にまた届きました。これも同じ文面です。仮釈放のお知らせ。そして意見陳述を出せ。そして事件内容も書け。また健康保険証、免許証も出せ。そして今回は仮釈放が許可されました。「今までの手続は何だったんですか。」ということを保護局に電話して聞きました。しかし、まともな回答は返ってきませんでした。何の説明もなく、私たちはこの仮釈放を鵜呑みにするしかありませんでした。三重県の保護観察所に行っても、何の返答もありません。私がなぜここまで一生懸命になったのか。

男の家族は大阪の方へ逃げていきました。逮捕から3か月して、男の家族はてっきり大阪の方へ逃げたのだと思い、そして保護観察がつくのも、仮釈放が認められるのも大阪だと思っていました。しかし、認められたのはなんと三重県でした。しかも事件当時住んでいた家でした。私の家から歩いて10分のところ。9年たった今、男はそこに住んでいます。しかも10年目の7月26日、夏休み中です。ストーカーでも接見禁止命令があるのに、なぜ国は、目と鼻の先の場所を選んだのでしょうか。私は本当に納得がいきませんでした。

そして先日、仕事帰り、もちろん生活道路ですから通ります。目の前に博美を殺した男が歩いていました。その時の心情が分かりますか。忘れるはずのない男の姿。私は、一旦コンビニに車を止め、指を全部食いちぎる勢いで噛みしめ、舌を噛み、自分で自分を殴り、男として親として殺すべきなのかと、博美の仇を取るべきなのかと、ものすごく悩みました。それとも今の家族を守るべきかと、今の生活を守るのかと。自分の理性を保つことに必死でした。そんなことは、加害者の男は知るわけありません。

どうやって生活してきたか、9月～10月は全く分かりません。加害者が釈放されること、自宅の近くに帰ってくること、なんでこんなにひどい仕打ちを司法はするのだと。司法は、日本の国はひょっとしたら、私に「敵討ちをとってこい。」と言っているように一瞬考えたこともあります。たかだか150年～200年前までは仇討ちが許されました。仇と言ったら、そいつを殺しても良い。7,700万というお金なんて、いるわけないです。私はその方がさっぱりしていいと思います。そしてその血がまだ私にも流れている。しかし、そんなことをしてしまえば、加害者と一緒になってしまう。そのどっちつかずの心境で、まだ私は今この場に立っています。

男の刑期が9月5日に終わったということは家族も知っています。しかし、まさかそれが家の近くに、事件当時の家に帰ってきているなど思ってもいないはず。私も口が裂けてもこれは言えない。何でも言える家族でもこれだけは言えない。みんな大阪にいると思っています。皆さんならどうしますか。言いますか。私はとてもじゃないが言えなかった。

長女や妻。特に妻は最近やっとなめてくれるようになったばかり。また、10年前に引き戻されると思うと、とても言えるような心境ではない。家族にとって地獄のスタートをさせることになると思うと、いまだに私は踏ん切りがついていません。そのようなことで、犯罪被害者遺族、犯罪そのものだけではなく、それに付随するいろいろなもの。書面でもそうですし、司法でもそうです。ものすごく苦しめられ続けています。

刑事裁判後、少年やその両親に足かせをつけようと民事裁判も起こしました。しかし民事裁判を起こす遺族は少ないと思います。精神力、体力、お金もかかるでしょう。しかし民事裁判でも起こさなければ、大阪へ逃げていった加害者とどういようにつながるか。大阪にいるのは分かっていますが、今度、北海道に行ったらどうなるのだろう。そういう裁判所の手続ひとつで唯一加害者とつながっているのです。

私はこの加害者を許せない。そしてその家族も許せない。博美に対しての損害賠償請求は7,700万円。1円ももらっていないし取れるわけもない。損害賠償請求というものは、10年という時効があります。それはまた10年たつ前に、こちら側が裁判をかけなければいけない。取れないものにかける必要ないじゃないか、かけなくてもいいじゃないかと思う人もいるかもしれませんが、私はどうも加害者が7,700万円という負債がなくなり、身軽に人生を歩くことがどうしても許せない。お金に代わるもの以外は何もないのです。取れるわけがなくても、私はまた裁判を起こすでしょう。そういうことでもしなければ、加害者が楽になるような気がするのです。それがどうしても悔しい。

刑務所にいる間、それは自分がしたことについての罰であって、刑務所を出てからが私は償いだと思っています。しかし世間の風潮では、刑務所を出れば全て許された、そんな風潮がはびこっていると思います。私はそれをどうしても許すことができません。

損害賠償の立替制度や、再提訴費用についても、自治体として機能しているところはほんの数か所ですが、国に対しても導入を求めている状況もあります。この制度があれば、被害者遺族が何年にもわたり、加害者に請求し続ける苦しみから解放されること。加害者のことを考えなくてもいい。心の負担が、ストレスが、どんなに激減されるんだろうと、犯罪給付金の増額だけではなく、この点についても今後議論していただきたい。三重県にも、もうあと何年もすれば出てくる加害者はいます。そして遺族もいます。その人たちが私のような目に遭わないためにもお願いしています。

そんな中、今年2月14日、自民党本部で司法制度調査会犯罪被害者等支援PTがありました。「新あすの会」代表の岡村先生のおかげで1席用意していただき、そこで元法務大臣、今の外務大臣の上川陽子議員に、そして前三重県知事の鈴木英敬議員、小泉進次郎議員、多くの方の前でこのことを訴えてまいりました。代表の上川さんは、目を潤ませながら、「寺輪さんの意向に沿えるよう頑張ります。」と約束してくれました。私は必ず司法を変えてくれると思っています。

その中、やっぱり最初に助けてくれたのは、私にとっては仲間でした。私は勤続30年。途中で独立しましたが、その社長は家族4人が3年間、遊んで暮らせるぐらいのお金を用意してくれました。すごく心強かったです。「これだけあれば、しばらく休めるだろう。何年たってもいい。必ず戻ってこいよ。」と、それだけ言うてくれました。

妻も看護師でしたが、ずっと看護学校を出てから、1人の院長についていました。夫婦で来てくれて、「マスコミが大変なら、私たちの使っていない別荘がある。そこに身を隠せ。好きなだけいたらいい。」と。そして現金も置いていってくれました。

お兄ちゃん、お姉ちゃんもそうです。みんなが顔を見に来てくれました。とりあえず顔が見たいと。悲しい時、つらい時に抱き合える友人がいた、これはかなりの救いになりました。自分の職場から理解をされること、単に経済的に助けられたということではなく、やはり社会の中で孤立していない、1人じゃないというのが安心感につながりました。

しかし、母子家庭ならどうなのでしょう。父子家庭なら。周りから嫌われている人、友達がいない人、その人たちはどうなのでしょう。私は周りには恵まれていた。そうじゃないだろう。犯罪に巻き込まれ、ましてや遺族になれば、受ける悲しみは同じなのに、なぜそんなに開きがあるのか。私はどうしてもそれが納得できませんでした。

いろいろ模索した結果、犯罪被害者支援条例がないことに気づき、県に働きかけ、29市町お願いをするんだから私は1軒1軒まわり、途中コロナがあったり時間もかかりましたが、今では全ての29市町、県にも市にも町にも、要綱もありますが、一応条例はつくっていただきました。

条例のある県とない県では、事件後の遺族の社会復帰に大きな差がある。例えば今、裁判中の京都アニメーションの事件、あれも日本全国から集まってきています。住んでいる県によって格差があってはならない。遺族の悲しみは同じです。

もし私の友人が地方で犯罪に巻き込まれれば、少なからず、ことの善し悪しを分かっている私は助けに行きましょう。しかし、見ず知らずの人を助けることはできない。そして助けたとしても限界があるでしょう。それなら自分の住んでいる地方自治体、県を頭に、市町村、そこに条例があればどんなに心強いこ

とかと私はつくづく思います。

全国には全ての市町に条例が制定されている地域もあるでしょう。しかし、逆に全くないところもあります。愛知県はそうです。50 くらいの市町があったと思いますが、今のところ 4 市しかありません。恥ずかしいことです。もっと一生懸命、三重県の横ですから、つくってほしいと、お願いしています。

犯罪被害者として、この 10 年間苦しんできた。私の伝えること、これから先どんな苦しみが待っているか。いつまで皆さんの前で私は話ができるのでしょうか。死ぬまでこの誘惑と闘っていかなければならないと思うと嫌になります。たくさんの被害者のための制度を、今一度御自身のこと置き換えて考えていただきたい。そして私のように声を上げる犯罪被害者遺族というのは、私は限りなく少ないと思っています。ここ東京にもいます。「新あすの会」、「宙の会」、名古屋では「緒あしす」、いろいろあるでしょう。しかし、声を上げなければ皆さんが気付いてくれない。それが大変残念でないことです。

条例は使われないことが一番いいですけれども、やはり三重県でも、何例かは使われているそうです。そしてある日、突然、犯罪者、被害者になることは誰しもあります。動機のない殺人、誰でもいいというような殺人、通り魔的な殺人、凶悪的な事件が毎日のように、皆さんも御存知でしょうが起きています。

そして、今と昔では、いろんな犯罪の形態も変わってきています。闇サイトを使ってあんな白昼堂々と強盗させる。学校では大麻を吸っている。違法ドラッグは液体化されてぱっと見何か分かりません。児童虐待もあるでしょう。DVもあるでしょう。不同意わいせつ、親が子どもを殺す、逆に子が親を殺す。白昼堂々の発砲もあるでしょう。総理大臣さえも殺されました。誰が想像できたでしょう。皆さんどう思いますか。あれだけの警備、屈強な S P、あれだけ囲んでいても防げなかった。一般人ならなおさら無理でしょう。しかし今では、その犯人を崇拜する者までいる。そして、模倣犯まで出てきてしまった。そして、加害者が日本人ばかりとは限りません。よその国の外人ならどうしますか。強制送還されたら？被害者は、遺族は、どこに怒りをぶつければいいのでしょうか。これはこの国の現状です。

そしてこの日本には一定の、私は怪物と言っていますが、怪人とか怪物、そいつらがいます。そして、そいつらは必ず自分より弱い者。絶対自分より弱い者。強い者には絶対行きません。意識して狙っているのです。捨て身の怪人、怪物。無敵の怪人、怪物です。そいつらには日本の法律、私たちの常識、秩序、これは全く通用しません。なんせ捨て身で来ますから、それは時間も場所も選びません。もう安全な所なんかないのです。犯罪がない世界、これは本当にきれいごとです。人がいる限り、犯罪は起きます。ならば、地震が来る時みたいに、津波が来る時みたいに、なぜ備えないのでしょうか。私は備えるのが人の知恵だと思っています。そして、不幸にも被害に遭ってしまった全ての犯罪被害者、犯罪被害者遺族にゆっくり悲しみに向き合う時間をつくってあげたいのです。自分の足で立ち上がるまでの支援を、支えを、つくってあげたいのです。

凶悪な事件だけでなく、事件に巻き込まれば、その時点でその人にとっては死ぬまで続くトラウマ的な事件でしょう。一生引きずっていく事案です。加害者になることは、ここにいる人たちは踏みとどまれると思います。しかし、被害者になることを想定して生きている人は、私はこの中にはいないと思います。こどもの時のように、網戸で家中開けっ放しで、玄関に鍵も掛けず。そんな時代の安心安全な日本ではもうないということです。いつ誰に何が起こるか、全く分からないということです。それが皆さんの家族ではないという保証もありません。

私は娘を奪われ、守れなかった自分を責め、少年やその両親、加害者、崩れていく自分の精神、ほかの家族を支えることもままならない、自分の無力さを味わいました。そして、この苦しみは時間と共に消えるものでもありません。生きていくうちに続くでしょう。どうか多くの人たちが犯罪被害者、そして遺族のことを理解し、支援の必要性を一人ひとり想ってください。自分自身のように考えてください。

私は、受け皿はたくさんあった方がいいと思っています。その受け皿を拒む者もいるでしょう。拒むものは拒めばいいです。自分の足で立てるものは、自分の足で立てばいい。しかし、選ぶ選択肢というのは、私はたくさんあった方がいいと思っています。条例がなければ、選ぶものも選べない。そんなことではだめだと思っています。

この東京というところは、博美も合宿で来たり、お台場には韓流を見に来たり、ディズニーランドにも行ったり、もちろん浅草にも行っています。この東京で、またこのように皆さんと会えて話ができるのも私は博美のおかげだと思っています。こんなことでもなければ、私が皆さんの前で話すこともなかったでしょう。ですから、今日この会場の中の、1人の方でもいいです。そして、その1人の方が、今日眠る前、帰る時でもいいです。1分でも30秒でも10秒でもいいです。私の話を少しでも考えてくれれば、私はこの東京に来た甲斐があると思っています。

若輩者が高いところから生意気言ったことをどうかお許しください。長くなりましたが、皆様の貴重な時間、私のいい話ではないですけれども、私の話を聞いてくださり、誠にありがとうございました。